

# ‘夏さやか’ に対するストッポール液剤の薬害について

## 1 情報・成果の内容

### (1) 背景・目的

植物生育調節剤「ストッポール液剤」はニホンナシの落果防止に広く使用されているが、一部の品種で散布の影響が疑われる芽枯れ症状が見られた。そこで、本剤の散布が芽枯れ症状の発生に与える影響について検討する。

### (2) 情報・成果の要約

ストッポール液剤の散布は他の落果防止剤に比べると芽枯れを発生させる場合があり、その感受性は品種によって異なる。特に‘夏さやか’は影響を受けやすい。

## 2 試験成果の概要

### 〈試験1 薬剤処理の影響確認、処理時刻の比較〉

- (1) 収穫一週間前の‘夏さやか’と‘ゴールド二十世紀’に、ストッポール液剤1,500倍液を朝または昼に散布し、落葉後の芽枯れ発生率を調査した。
- (2) ‘夏さやか’では薬剤処理により芽枯れ発生率が高まり、処理時刻別では昼処理で特に多くなった。‘ゴールド二十世紀’は違いが判然としなかった(表1)。

表1 ストッポール液剤の処理および処理時刻が芽枯れ発生率に及ぼす影響

処理区 <sup>z</sup>	夏さやか		ゴールド二十世紀	
	調査芽数	芽枯れ発生率(%)	調査芽数	芽枯れ発生率(%)
ストッポール朝散布	247	25.1	400	0.5
ストッポール昼散布	301	32.6	300	1.5
ヒモン昼散布	313	12.0	400	0.7

z 朝散布：6:00～6:30 散布 昼散布：13:00～14:00 散布

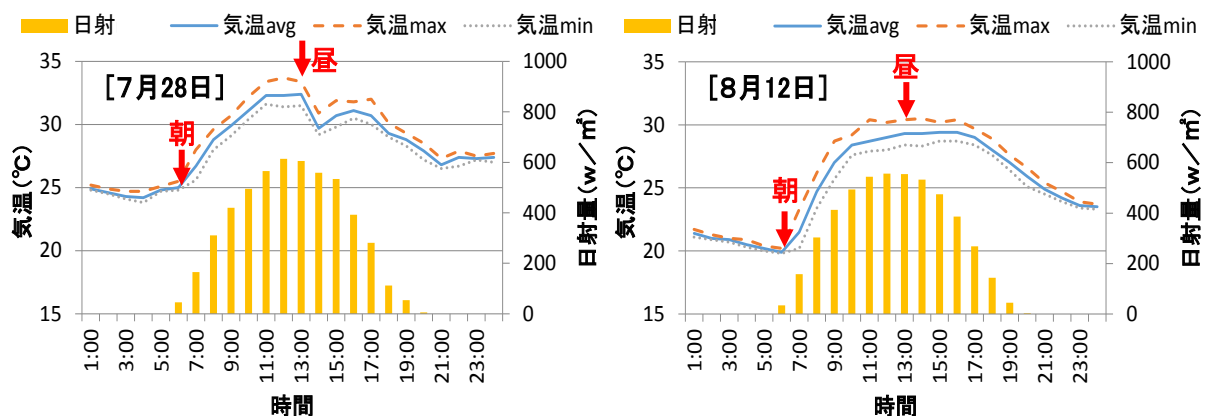


図 薬剤散布時の気象条件(左:‘夏さやか’、右:‘ゴールド二十世紀’)

※矢印は各処理区の散布時刻を示す

## 〈試験2 処理濃度の比較〉

- (3) ‘夏さやか’ と ‘ゴールド二十世紀’ にストップール液剤1,000、1,500、2,000、3,000倍液を試験1と同日の午後0時頃に散布し、落葉後の芽枯れ発生率を調査した。
- (4) 品種によって程度に差はあるものの、濃度が濃くなるほど芽枯れ発生率が高くなった(表2)。
- (5) 収穫期間中、すべての区で落果は見られなかった(データ省略)。
- (6) 以上の結果、ストップール液剤の処理は芽枯れを発生させる場合があり、その感受性は品種によって異なった。特に‘夏さやか’は影響を受けやすいため、使用にあたっては薄めの処理濃度(2,000倍)とし、気温の低い早朝に散布する方がよいと考えられた。

表2 ストップール液剤の濃度が芽枯れ発生率に与える影響

処理区	夏さやか		ゴールド二十世紀	
	調査芽数	芽枯れ発生率(%)	調査芽数	芽枯れ発生率(%)
1,000倍	184	44.0	429	6.3
1,500倍	202	32.2	423	2.8
2,000倍	190	22.1	404	0.5
3,000倍	151	15.9	441	0.0

## 3 利用上の留意点

- (1) 本剤の登録希釈倍数(青ナシ)は1,500~2,000倍であるが、‘夏さやか’に使用する場合、さらに薄い濃度(3,000倍)であっても落果防止効果は得られる。

## 4 試験担当者

果樹研究室 主任研究員 岡垣菜美  
室 長 池田隆政